

戦中派少女

鈴木理子

大和町一丁目

ファシズムと共に

私が生まれた頃、大陸では満州事変、ヨーロッパではナチスが第一党となった。幼稚園に入る年、二・二六事件。腰まで積もった雪に大はしゃぎした記憶がある。

杉並区和田本町(現在の和田二丁目)、広い庭のある大きな家で育った。まわりは畑と田んぼ、一面にレンゲが咲き、善福寺川の分流にはフナやコイ、裏には雑木林、ホタルやオニヤンマが飛び、西の空に富士山が見えた。

日中戦争がはじまり、出征兵士を送る日の丸の小旗の行列が見られるようになり、小学校へ入学した。中央線沿線に新しい住宅地がひらけ、その子供たちは、有名私立小学校や師範付属小学校へ通うため、中野駅、大宮八幡間の銀バス、新宿、代田橋間の青バス(今の都バス)、新宿、荻窪間を走る市電(チンチン電車)を利用していた。

私も銀バスで中野駅に出て、省線電車で池袋の小学校へ通い、四年生になり、太平洋戦争がはじまると、遠距離通学生徒は地

元の小学校へ転校命令がでた。小学校はすでに、国民学校になっていた。

ゴムまりの思い出

通信簿も甲乙丙から、優、良上、良下、可の評価になった。ナギナタ、棒のぼり、乾布まさつで健康第一の教育がおこなわれたが、校庭での全校生徒が上半身裸で乾布まさつは、寒い冬はつらかった。大詔奉戴日(毎月八日)には、全校で大宮八幡へ戦争祈願に歩いて行った。当時の杉並は現在より寒く、冬の朝は水道が凍り、道路に撒いた水も凍っていた。足先が冷たいので、靴の中に赤いトウガラシを入れたりしていた。

昭和十五年から、コメ、ミソ、サトウなど切符制で、生活必需品は統制、衣料も切符制、「欲しがりません、勝つまでは」の生活になっていた。日本軍がシンガポールを占領したころ、南の島の兵隊さんの贈り物として、女生徒にゴムまりの配給があった。二人に一個の割合で、直径十三センチくらい。私たちは、あまりの嬉しさに、教室でまり投げやまりつきをしてしま

い、先生に叱られ、廊下に並ばされて一つずつ殴られた。その先生も出征され、女の先生が多くなっていった。

女学生の勤労働員

昭和十九年三月、修学旅行もなく卒業して、学区制に従って中野駅近く（桃丘小学校のあたり）に校舎が建てられて、移転が決まっていた都立高等女学校に入学した。義務教育はこの年十二歳までとなり、卒業して働きはじめた友達も少なくなかった。入試は学力と懸垂だったと記憶している。結局、そこに校舎は建てられず、市ヶ谷の小学校の一部に間借りしていた。強制疎開で、小学生の数は大変少なくなっていた。

銀バスも木炭車となったが、十貫板など登れなくて、乗客が全員降りてバスを押ししたりした。そのうちバスも当てにならなくなり、中野駅まで二、三キロ、歩いて四〇分ぐらいだった。入学して一学期は授業があった。服装は、上着が都立標準服、モンペ、ゲートル（又は脚絆）、防空頭巾、非常食や三角布を入れた肩かけカバン、もちろん手づくりの布製のカバン、靴は手に入らず、祖母の帯芯でズックを作ったこともあった。

裁縫の時間に、兵隊さんの下帯（越中ふんどし）、水兵さんの訓練用帽子を縫った。軍事教練では、こわい教官の指導で、ほふく前進ばかりさせられた。そして二期には、学徒勤労令、挺身勤労令が公布され、私たちは大本営の地下本部の秘密の出口となる地下道（トンネル）を掘る作業を手伝った。おもに兵

隊さんが堀り、私たちはモッコで土を運び出した。二年生はサツマイモを刻み、醗酵させアルコールをつくる仕事。

私の姉は三年生で立川の中島飛行機工場へ行っていた。朝六時に家を出て、夜八時過ぎに帰宅。ジュラルミンで、ゼロ戦闘機を作っていたようだ。十四、五歳の女学生がつくった飛行機で、サツマイモのアルコールで、十八、九歳の全くの素人の学生の操縦。今考えると、なんてむなし、無謀なことをさせていたと思う。

学徒出陣、少年兵、勤労働員の学徒、この人たちの多くが若い命を失った戦争、絶対にくり返してはいけないと思うのである。

空襲、空襲の日々

サイパンが玉砕し、この年の暮からB29の本土空襲がはじまった。物資、とくに食料は急に欠乏し、連日連夜の空襲で、学校へ行っても落着いて授業もできなかった。非常食用の乾燥イモも、大豆の炒ったのももう失くなっていった。栄養が悪いので、生理がはじまった同級生もなく、ハゲ、タムシ、ヒフ病の人も多く、私は両手両足にひどいシモヤケで紫色にふくらみ、つぶれて血がにじんでいた。当時、公務員の父と、母や弟妹は満洲に行っていたので、私は祖母と姉の食事、洗濯、掃除をして、夜は黒いおおいをした暗い電灯の下で、小さくなったセーターをほどこいて手袋や靴下を編んだり、母の着物でモンペを作った

り、下駄の鼻緒を作り、すりへった下駄にすげたりしていた。家にあつた文学全集も全部読んでしまった。

硫黄島の玉砕、そして三月十日の大空襲。白い透明なB29の連隊が夜空を東へ飛んでいき、しばらくすると、東の空が真っ赤に染まっていた。次の日、青梅街道を新宿の方へ歩いていくと、手足や顔の焼けただれた人や、ぼろぼろの衣服の人が、よろよろと歩いてくる。四谷から向うは全滅だ、省線も動いていないと言うので家に帰ってきた。

二年生の五月からは、学校の授業も停止、同級生も大半は疎開し、五月二五日の大空襲で校舎も全焼した。私の家にも焼夷弾が落ちた。恐怖に動転し、足はガクガク。姉と二人で必死で叩き落とし、水をかけた。消し止めたあと、腰がぬけて動けなかった。防空壕の中で、祖母が虎の子の抹茶をたててくれた。父や母に会えずに、もうじき死ぬのだなと思った。この空襲で町内も点々と焼けた。

二日後、鍋屋横丁へ出ると、青梅街道の両側とも新宿まで見渡す限りの焼野原で、異臭がただよい、人影もまばらだった。焼け跡で茫然としゃがんで、水道管からぼたぼたと滴る水を手のひらで受けていた人の姿は、今も忘れられない。

ある夜、私は空襲警報にあわてて、お手洗から出ようとし、便壺にすっぽり落ち、姉に引きあげられ井戸端で洗った。家中臭い上に、自分自身も数日間臭くて困った。

庭は全部畑にして、カボチャやジャガイモがとれたので、やつと生きてこられたが、毎日近所でも戦死の報が入り、艦載機の機銃掃射で死ぬ人もあり、沖繩は全滅したという噂が流れ、いくら「軍艦マーチ」をバックに勝利をおさめたという報道がくり返されても、誰もが疑いを持つようになっていた。

姉の工場も爆破され、鉄道もはずたにされたので、姉も私も家にいて野菜づくりなどしていた。家が広がったので、下町で焼け出された知人が三家族同居し、助け合って暮っていた。

陸軍省に入っている商人のおじさんが、陸軍省には砂糖もコメもありあまっているそうだと話して、もらって来たキャラメルを二粒と、ようかんを一切れくださった。頭の中がぼうつとする程甘かった。

空白の日々

「海ゆかば」の音楽がラジオから流れ、戦況不利の報道も多くなり、東京の大空襲は減ったが、地方都市の大空襲は続いていた。八月になると、宣伝ピラが投下され、下手な字で、早く降伏しなさいというような事が書かれていた。町会長さんが竹槍を配ってまわり、皆で死ぬ時は、アメリカ兵を一人殺して死のう、つまり「一人一殺」と言った。そのころ、広島に新型爆弾が落とされ、すごい威力で、爆発の光を見ただけで黒こげになり、広島は全滅したという話が伝わってきた。

そして、ソ連の参戦、長崎にも原爆、玉音放送となった。暑

い暑い日だった。さるすべりの花が咲いていた。日本人は全員殺される、女は犯されるなどの噂が乱れとび、恐怖のためか、閉じこもっていたためか、病気でしまったのか、八月十五日から学校が再開されるまでの二、三週間の記憶は全くないのだ。全くの空白の日々だった。

飯田橋近くの、外壁だけ焼け残った窓ガラスも床もない校舎で、同級生や先生と再会し喜びをわけ合った。秋になり、もう会えないと思っていた父母や弟妹が突然引き揚げてきた時も嬉しかったが、その後の食糧難、財産税で家を失い、農地改革で土地も失い、七人の子供、祖母と十人の家族の生活はつらいものだった。日本人全部がつらい悲しい時代だったのだ。

私たちの年代は、着る物、生活道具など、創作し工夫することがかうまくなった。姉が戦争末期に飛行機工場でもらってきた、特攻隊の白いマフラーやパラシュートの白い布は、姉や私の下着（ズロースやシミーズ）になった。スフだったが、本当に重宝した。

十歳から十四歳までの少女時代の私の写真は一枚もない。かわいい少女の時代は、私にはなかったのかもしれない。

